

指導内容に応じて「聴き合い・語り合い」をつくる

指導内容を確認して設定します。



「聴き合い・語り合い」の姿を高めていくことに重点を置き指導を重ねていくと、「聴き合い・語り合い」という活動自体を指導目標と捉えてしまうことがあります。ここで改めて確認しておくことは、「聴き合い・語り合い」は、あくまで指導の手だてであり、指導内容ではないということです。

「聴き合い・語り合い」は、子どもたちの語り合いたいという意欲がわく課題のもとで生み出されていくものです。始めから「聴き合い・語り合い」ありきで授業を構成していくと、子

もたちの意欲を高めていくことができません。また、「聴き合い・語り合い」の質を高めようとして、学年の指導内容を超えてしまうことがあります。これでは、子どもたちの学力を高めていくことはできません。

そこで、学習指導要領で示されている指導内容を確認していくことが必要となります。「聴き合い・語り合い」が、学年の指導内容に応じた言語活動や算数的活動になっているのかどうか、常に原点に立ち戻って確かめていく姿勢が大切なのです。

有効な場面で効果的に行います。

「聴き合い・語り合い」は、学習単元のすべての時間に設定できるものではありません。指導内容に応じて言語活動や算数的活動を設定し、単元を構成していった時、「聴き合い・語り合い」が有効に機能する場面は、限られてきます。

「聴き合い・語り合い」には、全員が多様な考えを出し合うことで、新しいものを生み出していくという価値があります。よって、子どもたちの多様な考えが生み出される指導内容のもとで、有効に機能していくことになります。逆に、考えを広げたり、深めたりしていくことが難しい内容では、十分に機能しません。

また、「聴き合い・語り合い」を1単位時間の中のどの段階に設定していく

か検討していくことも大切です。このことは、学習の山場を中心とした授業づくりの正否に関わることもあります。

例えば、算数の学習においては、「見通し」の段階に位置付けていくと、効果的な場合があります。「見通し」の段階では、多様な考えを知ることにより、課題意識をより明確にもち、主体的な自力追究の姿を生み出すことができるからです。

国語の学習においては、すべての交流活動を「聴き合い・語り合い」として捉えるのではなく、その時間の中核となる内容に焦点化して、「聴き合い・語り合い」を設定すれば、主体的な言語活動を生み出すことができます。



聴き合う子どもたちを育てる

まず、「聴き合う」ことに重点を置きます。



よりよい聴き合い・語り合い活動を創り出していくために、先生方は、最初にどんな指導を行いますか。

久原小学校では、最初に、「聴き合う」ことに重点を置いて指導を行っています。子どもたちが目を輝かせながら自分の考えを語り合うためには、周りの子どもたちが、友達の考えをしっかりと「聴く」ことが必要です。また、単なる「聞き合い」ではなく、自分の考えを整理し創り出すための「聴き合い」になることをめざしています。

「聴き合い」は、聴きたいと強く思

っている子どもたちが存在するからこそ生み出されます。先生の話を一方向的に「聴く」際には、「聴き合い」は生み出されません。また、お互いに自分なりの聴きたいこと（解決策など）を持っている時、聴き合う場と時間があれば、必然的に生み出されていきます。

そこで、すべての教科・領域において、聴き合いを生み出すことができる学習内容や方法を工夫し、継続的に指導を重ねていきます。多様な内容や方法を積み重ねていくことで、聴き合う学び方が身についてきます。

学習規律の定着が基盤となります。

学級に「聴き合う」仕組みをつくっていくにあたって大切にしていくことは、しっかりと学習規律を定着させていくことです。

まず、正しい姿勢で学習することを指導していきます。足の裏を床にぴたっとつけ、腰骨をぴんと立て、机と椅子との間を開けて座るよう繰り返し指導していきます。どの学級でも行われている当たり前のことですが、「聴き合う」ためには、とても大切なことなので常に意識をさせておきます。

次に、発表者の方へ体を向けて、正面から聴くことを指導していきます。発表者の考えを聴く際に、相づちを打ったり、拍手をしたりしながら、集中

して話を聴く習慣をつけていきます。これも正しい姿勢と同様に、当たり前のことですが、発表者が「自分の話をしっかりと聴いてくれている」と感じていることが大切なのです。ここでは、体の向きを変えやすいように椅子の位置まで、細やかに指導しておくことが必要となります。

そして、これらの学習規律を、全体交流、グループ交流、ペア交流といった交流の形態に応じて、きめ細やかに指導していくこととなります。

学習規律を定着させていくだけでは、真の「聴き合い」を生み出すことはできません。しかし、「聴き合い」の基盤として欠かせないものなのです。



語り合う子どもたちを育てる

「語り合い」への抵抗感を減らします。



学級には、発表に対して抵抗を感じている子どもたちがいます。その要因として、「自分の考えを十分につくることができない」「発表の仕方がよくわからない」「自分の考えに自信がない。」などが考えられます。

発表への抵抗を感じている子どもたちが、進んで「語り合い」を行っていくことができるようにするためには、どのような支援を行えばよいのでしょうか。

本校では、その答えをとともシンプルにとらえています。自分の考えを十分につくることができていないならば

考えをくることができるまでしっかりと時間を確保します。そして、考えをつくることができるように、よりきめ細やかな手立てを加えます。一人一人の子どもたちが自分の考えをしっかりともった上で「語り合い」を進めていきます。

発表の仕方がよくわからないならば、身に付けるためのスキル学習を連動して行います。自信がないならば、自信をもたせるために、机間指導で朱筆を加えたり、発言内容や方法を評価したりしていきます。様々な角度から、抵抗感を少なくしていくことが必要と

到達目標を段階的に高めていきます。

「語り合い」の質を高めていくためには、到達目標を段階的に設定し、スモールステップで指導をしていきます。

低・中学年では、「〇〇ですね。」「〇〇ですよ。」など、語尾に「ね」や「よ」をつけるように指導することで、相手を意識した「語り合い」ができるようになってきます。

また、「さっき、〇〇さんがいったことにつけくわえて、わたしは、……だと思えます。」「〇〇さんがいった……とはちょっとちがっていて、わたしは、……だと思えます。わけは……」のように、友達の名前と話の内容を発言するように指導していきます。

さらに「〇〇くんは、△△と言いましたよね。もし、わたしが……だったら、……」のように、自分の経験と重ね合わせて発言するように指導していきます。

このように、到達目標を段階的に設定していくことで、相手を意識した「語り合い」にさらに近づいていきます。

子どもたちの「聴き合い・語り合い」の姿が思うように高まらないこともあります。しかし、決して背伸びをせず、小さな成功を重視しくことが大切です。子どもたちの姿を、何が出来なかったよりも何が出来たのかを大切にして見取り、評価していくことがよりよい「聴き合い・語り合い」をつくり出していきます。



発問・形態を工夫し、「聴き合い・語り合い」をつくる

中核となる発問を工夫します。



よりよい「聴き合い・語り合い」では、子どもたちの発言がつながり、教師の出番が少なくなります。子どもたちの発言がつながっていくようにしていくためには、教師の発問を工夫していく必要があります。

発問づくりで大切にしていくことは、事前に行う言語活動と算数的活動の内容と連動させ、中核となる発問をつくっていくことです。何度も重ねて発問するのではなく、一つの発問で子どもたちの「聴き合い・語り合い」が主体的に進んでいくようにしなければなりません。

国語の学習では、「どんなことがわかりますか?」「どんな気持ちでしょう?」などの曖昧なものではなく、「ちがいはどこですか?」「()に適した言葉は何ですか?」など、指導内容に応じたより具体的なものにしています。

算数の学習では、「何か質問はありませんか?」「〇〇さんの考えはどうですか?」ではなく、「Aの考えとBの考えを、どちらが簡単ですか?」「どの方法が正確にできますか?」など、指導内容に応じて、数学的な価値を問う発問をつくっていきます。



発達段階に応じて形態を工夫します。

「聴き合い・語り合い」の形態は、指導内容と発達段階に応じて、多様に工夫していくことができます。

低学年では、2人組のペアで行っていきます。すべての子どもたちに自分の考えを説明する場を保障していくことで、「聴き合い・語り合い」の基礎を培っていきます。ここでは、一方的に説明していくだけで終わらないように支援していきます。例えば、「聴く側の子どもたちが、質問をしたり、評価をしたりしていくこと」「時間内は説明と質問を続けること」などのルールづくりをします。また、「説明・質問の手順」「ノートの提示方法」などのスキル指導も必要です。さらに、実態に応じたペアリングも大切な手立てです。

中学年では、ペアからグループへと形態を進化させていきます。グループでは、複数の相手への説明が必要となり、よりわかりやすく説明していく姿を生み出していくことができます。また、質問や評価の質や量が高まり、「聴き合い・語り合い」の進化につながります。

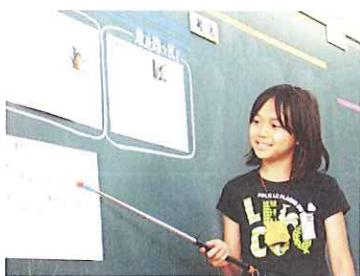
高学年では、パネルディスカッションやシンポジウムなど、より進化した形態を取り入れたり、課題に応じて自分で相手を選択して協議したりしていきます。

このように、「聴き合い・語り合い」を進化させていくためには、発達段階に応じて、その形態を高めていくことを大切にしていきます。



「聴き合い・語り合い」ができる支持的風土をつくる

語り合いのよさを感じさせます。



中・高学年の子どもたちには、「聴き合い・語り合い」のよさを感じさせていくことが大切です。

「自分の考えを発表したいから発言する」、「発表しなければならないからしかたなく発言する」など、子どもたちが、活動のよさを感じていない交流活動は、真の「聴き合い・語り合い」とは言えません。自分の考えをもって主体的に活動に参加できるようにしていくことが必要です。

子どもたちに感じさせたい「発表することのよさ」は、協働的な学習のよさとなります。

協働的な学習のよさを言い換えれば、「みんなでよりよいものをつくり出すこと」となります。「聴き合い・語り合い」を通して、「全員が多様な考えを出し合うことで、新しいものが生み出されること」、だから、「間違いにもよさがあること」を感じさせていきます。

そのためには、教師も子どもも、一人一人の考えを学級全体できちんと評価していかなければなりません。互いに価値づけ合うことで、学級のみならず、みんなでよりよいものをつくり出していくという協働的な学習のよさを感じ、支持的風土がつけられていきます。

聴き合いのよさを感じ、そして、お手本に。

「聴き合い」のよさを「語り合い」のよさと明確に区別することはできません。「聴き合う」ことは、「よりよいものをつくり出していくこと」につながっています。

「聴き合い」のよさとして、感じさせたいことは、「相手のよさを知ること」です。子どもたちの考えは、一人一人違います。それぞれのよさを互いにしっかりと受けとめさせていくのです。子どもたち同士で評価し合い、教師も評価を加えることで、「聴き合い」のよさを感じ、支持的風土が高まっていきます。そして、学級が一つのチームとしてまとまり、学習活動が主体的に展開されていきます。

さらに、「聴き合い・語り合い」のよさを感じ、その姿が高まった高学年の子どもたちの姿を低・中学年の子どもたちにお手本として見せていきます。

低・中学年の子どもたちにとっては、「聴き合い・語り合い」のよさは、実感しづらいものです。そこで、お手本となる高学年の姿を見ることで、具体的な目標をもつことができます。また、下学年の子どもたちに評価された高学年の子どもたちの姿も、さらに高まっています。

よりよい「聴き合い・語り合い」を生み出していくために、学校全体が一つのチームとなり取り組んでいくことが大切です。

